

中等教育研究開発室年報 第32号（2019年3月31日発行）別冊電子版
2018年度 授業実践事例

社会科・地歴科・公民科 高等学校第Ⅱ学年

国際社会と平和について考える

授業者 阿部 哲久

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 公民科(政治・経済) 学習指導案

指導者 阿部 哲久

- 日時** 平成30年10月13日(土) 第1限 9:30~10:20
- 場所** 第1社会科教室
- 学年・組** 高等学校Ⅱ年政治・経済選択クラス46人(男子27人 女子19人)
- 単元** 国際社会と平和について考える
(「国家主権、領土」及び「我が国の安全保障と防衛」と『国際法』)
- 目標**
1. 主権国家体制の特徴と国際法の役割や限界について理解する。(知識及び技能)
 2. 知識・概念および選択・判断の手掛かりを用いて平和国家としての日本の政策について構想したことを表現し議論する。(思考力, 判断力, 表現力)
 3. 合意形成や社会参画を視野に入れながら意見や立場の違いを超えて議論する。(学びに向かう力・人間性)

指導計画 (全6時間)

- 第一次 課題の提示, 「直観にもとづく孤立集団」による熟議 (enclave deliberation), 資料による知識の獲得, 選択・判断の手掛かりを用いて合意形成をめざした議論 (ジグソー) と発表 2時間
- 第二次 『国際法』『平和』の概念・理論についての学習と, 孤立集団による熟議 (enclave deliberation), 選択・判断の手掛かりを用いて合意形成をめざした議論 (ジグソー) 2時間
- 第三次 孤立集団による熟議 (enclave deliberation), 選択・判断の手掛かりを用いて合意形成をめざした議論 (ジグソー) による合意形成と発表 1時間 (本時 5/6)
- 第四次 選択・判断の手掛かりを用いて合意形成をめざした議論 (全体でのジグソー), 発表, 教師のコメント, 個人によるふりかえり 1時間

授業について

本授業は「政治・経済」の授業として行うが, 「公共」の授業を想定したものである。

公民科では, 新科目「公共」が必修科目とされ, 「選択・判断の手掛かりを用いて合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う」こととされている。このような力は混迷する現代の社会を生きる生徒たちにとって必須の力であり「公共」に期待されるところは大きい。一方で文部科学省からはB「自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」の11単元にそれぞれ3~4時間と例示されており, 限られた時間数の中でどのように目標を達成するかという課題が現場には課せられている。

本授業では, 「平和主義を掲げる国として日本はこれからどうしていくべきか」という大きな問いをたてることで, 「主権国家体制における国際法」という両単元を貫く概念を鍵に, 学習指導要領で「国際法と関連させて取り扱うこと」とされている二つの単元「国家主権, 領土」及び「我が国の安全保障と防衛」の内容について関連させて理解を深めさせるとともに, A「公共の扉」で身に付けた選択・判断の手掛かりも用いて合意形成をめざした議論をできるようにさせたい。その際, サンスティーンの指摘をふまえ, 孤立集団による熟議とジグソーを組み合わせる。また適切に専門知にアクセスし「見方・考え方」を獲得できるよう講義や知識構成型ジグソーを配置することで, 平和主義のジレンマに気づかせ, 平和の実現が「なぜ難しいのか」を理解した上で, 「答えの無い問題」に向かって専門知に適切にアクセスしながら合意形成をめざして議論する力を育成したい。

題 目 ～孤立集団による熟議 (enclave deliberation) とジグソーの往還による合意形成～
「平和主義を掲げる国として日本はこれからどうしていくべきか」

本時の目標

1. 知識・概念および選択・判断の手掛かりを用いて孤立集団による熟議 (enclave deliberation) を行い、そこでの議論をジグソーの場面で適切に表現できる。
(思考力, 判断力, 表現力)
2. 国際法等の概念を用いて「平和についての議論がなぜむづかしいか」を説明することが出来る。
(知識及び技能)
3. 相互の立場の違いや、その場にはいない人の立場を考えながら議論できる。
(学びに向かう力・人間性)

本時の評価規準 (観点/方法)

1. 知識・概念および選択・判断の手掛かりを用いて表現し議論している。
(ルーブリックにもとづく相互評価/ふりかえりシート (後日))
2. 相互の立場の違いや、その場にはいない人の立場を考えながら議論している。
(ルーブリックにもとづく相互評価/ふりかえりシート (後日))

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
○前時までの確認	・主権国家体制における国際法および、リアリズムの国際関係論, 安全保障, 積極的平和, 人道的介入主義の諸理論と批判について前時までの学習を確認する。	・各自のポートフォリオで確認させる。 ・キー概念を示し, 時間をかけずにこれまでの学習を想起させる。 ・ゴールについても再確認する。
○孤立集団による熟議 (enclave deliberation)	・同じ意見の生徒で集まり意見をまとめる。	・1人が長くしゃべらないよう指導する。 ・生徒が持参した資料が適切かチェックする。
○ジグソーによる熟議	・異なる意見の生徒で集まり意見をまとめる。(本時で一旦合意をおこなう)	・より多くの人の幸福と公正をともに考慮したものになるよう再確認する。 ・そこに居ない人を考慮しているか, 公共の基本原則等について意識させる。
○仮の意見発表	・合意の結果を発表し合い, 相互評価シートに記入する ・質問があれば記録しておく。	・必要に応じてコメントする。 ・次時の全体討議について予告する。
備考 (主な参考文献) 松元雅和『平和主義とは何か 政治哲学で考える戦争と平和』中公新書, 小田桐確ほか『ワークブック国際関係論 身近な視点から世界を学ぶ』ナカニシヤ出版, マイケル・ウォルツァー『戦争を論ずる 正戦のモラル・リアリティ』風行社, キャス・サンステイーン『熟議が壊れるとき: 民主政と憲法解釈の統治理論』勁草書房		

実践上の留意点

1. 授業説明

本授業は「政治・経済」の授業として行うが、「公共」の授業を想定したものである。

学習指導要領で「国際法と関連させて取り扱うこと」とされている二つの単元「国家主権、領土」及び「我が国の安全保障と防衛」を、「主権国家体制における国際法」という両単元を貫く概念を鍵にして構成した授業案を作成した。

問いは「平和主義を掲げる国として日本はこれからどうしていくべきか」という大きなものにし、具体的な課題として安全保障と国際貢献のあり方について判断を求めることにした。課題は具体的な方が考えやすいものの、これまでの実践からは生徒はとかく制度の細部の話などにとらわれやすく、問題の本質からそれた議論になりがちであることが明らかとなっている。具体的すぎない課題を複数提示することで「見方・考え方」や「選択・判断の手掛かり」を活用した議論になることを目指すことにした。

本授業では、「深い学び」について「脱・欠如モデル」「社会学 1.5」という2つの視点をもとに、主体的に「見方・考え方」を獲得する力の基礎として、複数の「見方・考え方」を拡張しながら数段階に分けて提示する構成とした。具体的には「主権国家体制」「戦争、平和に関わる諸概念（人間の安全保障、積極的平和、人道介入主義等）」「国民国家」について課題を提示し、自分の考えを整理させた後で諸概念の学習を行って複数の「見方・考え方」を獲得させ、それらをふまえた議論をさせる展開とした。また、本単元は、選択と判断の手掛かりの点では表1のC、Dに該当する。単純に功利主義でも義務論でも答えが導き出せない課題であり、対話の中で社会的に答えを見出さなくてはならない問題であるといえる。このような問題に対して、主体的・対話的に「見方・考え方」を駆使しながら議論をすすめることが「深い学び」を実現させる上で効果的であると考えた。

表1 社会的な問題の整理

A	社会道徳と功利主義、義務論の結論が一致する問題。	論争問題にならない。 個人の問題として処理。
B	義務論と功利主義の結論が一致し、社会道徳と対立する問題。	同性愛、夫婦別姓など、現在進行形のものもある。
C	功利主義による調停が難しい問題。	人工妊娠中絶など、政策選択が「社会に委ねられる」問題。
D	義務論と義務論が対立する問題（「義務の葛藤」）。	困っている人を助けるために嘘をつくべきか等。
E	義務論と功利主義が対立する問題。	トリアージなど、既に政策的に行われており議論が存在する。

2. 研究協議会より

質問者:アクティブラーニングで深い学びを目指す場合、生徒同士の意見交換ではなく、意見を戦わせることが必要だと思う。その過程で反論の質を高めていくことが必要だと思う。その場合の適切な人数をどう考えるか。さらに進行役・まとめ役がいるのではないかな。

授業者:役割分担はなく、自然にできるようになることをめざしている。4人までが良いという考え方もわかるが、同質性の高い教室空間では同意見の生徒どうして意見が極化する危険性も高い。今回は自分の直感に基

づく意見が異なる生徒が各グループに存在することを重視して人数を決めている。

質問者:今回の授業内容に限定して、見方・考え方を変えるには、今後どう展開するのか考えを知りたい。だれかの一つの意見をメインにして質問したり考えたりして議論を深めていくあり方もありうるのではないか。

授業者:特定の意見に偏っていたが、前時を急ぎ足で進めたことが影響していると感じている。もう一度時間をとってどのようなジレンマがあるのかを確認し、考えさせていきたい。

質問者:議論が成立して一定の合意を目指すうえでの、問いの設定について、範囲・レベルをどのように設けることが重要なのか。失敗例も含めて教えて欲しい。

授業者:この前の単元では、議論の中で予算をどうするかといった狭い範囲の議論に留まったという課題があった。具体的な話は意見を言いやすいので生徒は活発になるが、ある程度の大きさがないと価値判断などの議論が深まらなないと考えている。

質問者:評価の仕方を教えて欲しい。

授業者:定期テストで議論の過程や内容、グループの意見に対する自分の意見などを詳細に書かせている。グループの議論がどれ位深まったのか、その中でその生徒がどうだったかを評価することができると考えている。

※本授業についての単元全体の指導計画や詳細な評価等については、中等教育研究紀要第65号にて報告しているので参照されたい。